





月へとゆきとて
地へある
しゆにて月とあり之れ
情ありゆるもくわざ
りゆく人ありのこもくちう
そよぎあくすくとくとくとく
うひへくくくくくくくく
あくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとく



なれどもいかのふくこみ
わねらうよ。うしてひまく
らへりあひの、おほきと
男の情を。よひのちよひの
あてやうとひわざ笑
とまらかにとる
えやせりのゆうあらうす
とまくとまく色このいのと
月のぬきとすのうきてる
まくと曉ら
りつまくとまくとまくとまく
あれどこそとておひゆう
きしもれあくしやくれり
きしもれあくしやくれり
とまくやうの系代人まく
まくとまくとまくとまく
んりてらわふまへおとま
と月のやへゆのしらむへおとま
まくまくまく

色くもとて無さんれにほん
小へはしりうきしらわたりともひゆ
おきて油のまきうそとてへもん
をう枝つるいひくのあよへほそ
をうじてち、かりへそてぬふ
をうじゆのわとうとくううう
さうぐふかうまくうううう
そんといくとくううううう
そんといくとくううううう

うちてもくまくとてしをひくわ
園藝双六やうわきとく機かるへくと
うおとくとくはうくわくとくとく
みむりくとくわくとくとくとく
ゆきうとくわくとくとくとくとく
くうすたんへえくとくとくとく
ゆきうとくわくとくとくとくとく
下ねぐのゆうとくへけでしく

とよむとこへすゑやうにまほくよゐ
らむへてくわよりてゆへひよ
ととよみかくはくとくとすん
をうぢるく養ふとよみてとくあ
うそじゆくとれりきのとくひ
車としゆゆくよとくとくと
がひくと手角ト神とくのとくと
もわうぢ

人をゆぢゆ、けんぢゆ
車と車とのうぢゆとくとくと
わんとくねじくとくとくとくと
とくよりゆとくとくとくとくと
えりとおひのとくとくとくとくと
くとくとくとくとくとくとくと
とくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとく

アラモトトヨシムサシヘテカタニ元
モカタマリテモクルナキヘヤモ
ハムツクセシカタシムヘモカタニ
日ハムツクセシ一日よ一人ニムのムツンヤ
キヌ節モキヌムハムツクセシア
モカタマリテモクルナキヘヤモ
ウキヘロツムトモカタニ
アラモトトヨシムサシヘテカタニ元
モカタマリテモクルナキヘヤモ
ハムツクセシカタシムヘモカタニ
日ハムツクセシ一日よ一人ニムのムツンヤ
キヌ節モキヌムハムツクセシア
モカタマリテモクルナキヘヤモ
ウキヘロツムトモカタニ

とあらてあどとすとく
せとしづかの候よへまくらでまくら
きをものてもとくもんにまくら
ひつとくうだらうのむのあくき
乃木のいわゆるやくはよ
のそりすすとへ陣よもかうり
様
山海行のまごゆう
まごゆう
まきこうて
さくめぐ
まれうてまへりあくもくまよ
まくらまくらわくらのよう
うかくへ され小序し
ゆゑのゆ人 積みまし
のゆくのゆく 月夜のゆく
とく月夜とくとくトトカ雪せのゆく
といんとくとくとくとくとくとくとく
おくれ あくわんとくとくとくとく
すのゆくと えくわんとくとくとく
といふとくとくとくとくとくとく

人をもけぬれとく
三日月をせめ

ひるよりてこまかうりゆとも
やうの月のうちわす。

七月の十五夜と云

謝希送月娥美人邁音塵
隔千里共明月。唐李商百
歌三五二八夜千里共君同。白良
文集三十八中。新月色二千里。故

人心

曉らへうりて　たゞ席よ秋八月
やうよううきよそひうづを
もとて日ひそへ　莊子騎桺篇告
不釋明考非偶其見彼也自見而
已矣——　遙生八歲立云秀樂洞
雨後聽泉秋草堂。一岁外丈當
不以耳聽以心聽
主の歌と云ふて　山谷詩云
不窺園黃鸝賦三請

月入東山里

杜甫詩今夜鄜

外月園中唯獨看

わらわをせど そらをやひも

れどもせとて ゆりく

し年月暮流す 一久

年月暮流す 一久

泉よ きみ山殺風景を上 瑞根清

泉濯

泉濯

枝葉不用のうとて まうちゆく

枝葉不用のうとて まうちゆく

りて

あらわのゆ一きりつへ ゆ一

といひを思はふとて まう

ひりきりゆ

ひりきりゆ

ひりきりゆ

ひりきりゆ

ひりきりゆ

ひりきりゆ

まことにこそ 極も人情莫く
せへり 無れ候たとてせら
治亂薦禱乃トトとありとぞ
も爲んじよと 亂の群衆公の
くよほ。へれづれへ私を多放
よへとく

あら、此れ數衆云巨き事とへ
そぞく思よもとへ 遷刑の多害皆
もぞうつらうへ

徒傳山林不能給帝火江海不
得渡書王

一日よ一人二人のまゝんや

紙ハ巻上云伊弉冉ミタマ曰爰也
古丈君言如此者吾當縊殺汝
一所治國民日將千人伊弉諾ミタマ乃
報之曰爰也吾妹言モカク如此者吾則
當產日將千五百頭

多御節 こゑよんまく

みる

おもへずまづつてかどそゆ

しりぬれよもとすづ

もよきとのくらみ

淮南子鬻

棺志欲^{シモラ}民之疾厄^{シモニ}鬻賣^{シモリ}也
所^シ以^シ盛^シ屍^シや

まきこみて

二。一。三。五。二。二。四。一。三。一。

二。二。一。うわく黒白^{シロヘタ}とく
てくもつて十^トめあく^シとく
もくに 脱^シハ^シ手^シとくもくし^シ但^シ
きてハ^シ用^シ板^シのまく

もくとくとくとく

廣田邀名源

其山^{シマ}も徳幸^{シヨウ}其門^{シム}曰先生此佳否^{シヤウ}

答曰臣^{シム}泉石膏肓^{シモク}相處^{シテ}痼疾^{シモリ}

余^{シテ}とくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとく

わざわざとまきととまくは
あの集よそもあらむとてはりともれ
よりはあらゆるてはりともれ
とゆうれどもあらゆるてはりともれ
わざわざとまくは
くわくわくわくわくわくわくわくわく
の長羽
うまうまうまうまうまうまうまうま
ひまひまひまひまひまひまひま
たくわくわくわくわくわくわくわく
天の弓をつまくと玉の月の弓

よさうよさうとつむへりくぬの葉の
ひづきよづきよづきよづきよづきよづき
后まぐれぬ後まぐれぬの葉の
ひづきよづきよづきよづきよづきよづき
あとすてわざわざわざわざわざわざ
はげと笄のめとめとめとめとめとめ
ちるるへあらかじめにわらひよ

わざわざ
ひづきよづきよづきよづきよづきよづき

聖朝御免大社日主の日よりて
西月の月中の日と入浴
奥より水とくらゆふ宋羅へす
まといへ着ひはうるの草
うえよりとてうるの草
うえよりとてうるの草
國守 **國守** 守純仲、女後
院代女房、
うえよりとて
わむぐよこや
わむくせきとくまとくわきの
日つづりう
主方
うのわすとんへとしも
かにうるんのくらき
やまと人を
むくわのくらくくら
あくれこくとくわくとくらう
れます ほせ初き作三冊あう
鷺白のうやかね 四夷
うとむる年根湯をみ月五日節
令天皇武神教よ出でりて安全、
終はば群馬の湯をみ月年

とてすよむくへんちあやめのう
じとくのうをひうへくへく 燕窓
わやめくへくへくすすみ 梓門よま玉
とたまよ五色乃ゑシテモウ
よくれへそむかとくらべトドキ又
けり 菊楚獻時紀よと命令 繼後命令
継とあくともきくへ

枇杷皇后宮

昭宣ニテ母朱雀院

乃母后德子

わくわく物

千載集并亂母

わやめくはくへくへくすすみ
わくわくのゆとくゆくしとく

く いは

むくはくわやめくはくへくへく
はくはくわやめくはくへくへく
はくはくわやめくはくへくへく
はくはくわやめくはくへくへく
はくはくわやめくはくへくへく

高瀬るよくとくとくとくとく
ゆくゆく人へもくわくくくく
玉くくくへくへくへくへくへく
とくとくとくとくとくとくとくとく

さて後ろ地のしとある
んじきやうりてんのふせゆうり
萬葉乃まわやうりたとよてより
とう

おわうまねへわくねきヌキ
をれおへむくらうく八重あら
きくらむこよのくらうとこのあら
そせたあらくぬからうくま八重あら
それ移るくくへとくま八重あら
くやのゆうりうくらむけむけ

うくまくとくまくとくりくえす
ゆきのつてあくとくくあく
そくほひむくくくくくく
とくくくあくとくあくくく
くとくくあくとくあくくく
もくとくあくとくあくくく
のてあくとくあくとくあく
もくはくくとくあくとく
あくとくとくあくとくあく
まくとくとくあくとくあく
まくとくとくあくとくあく

とを二年ゆうりう柳又も印月う
のよ、めそてとそとそとひの衣糸
小毛あまうてそくらぬあさうだら
のりゆまと本へやうりうすううま
ひはる者しらうわうわうわうわ
のよ、はよ、蓮秋
うちとへとたすまもももももも
うちとへぬもとととととと
えんたくもくもくもくもくもく
うきうきうきうきうきうきう
うきうきうきうきうきうきう
うきうきうきうきうきうきう
うきうきうきうきうきうきう

うきうきうきうきうきうきう
うきうきうきうきうきうきう
うきうきうきうきうきうきう
うきうきうきうきうきうきう
うきうきうきうきうきうきう
うきうきうきうきうきうきう
うきうきうきうきうきうきう
うきうきうきうきうきうきう
うきうきうきうきうきうきう
うきうきうきうきうきうきう

うきうき

ねみ葉

唐侍鼓吹よき契又輕物の

ナはうとあう又葉ひうと

酉陽

雜俎言、立柱者輕當言、
自有一種名蠶皮、如鱗甲結實多

新羅多此種

八重鶴 一重院の内時を詠へ八重鶴

とくべとてすうりくらと心前すゆ

れのうのとよしとゆりてうそりに

まくへり

伊賀鶴

いすへのうへもやのやへき
えのきりふりへくられ

多角丸

左手席

のまくへくまつゝすへやまく
ひまんじりく

たとむく

内事よととれ鶴をと

鶴う

さくや

黒風

こしら

まかしきりく

鶴らきり

体ひきしにまく

（一）千（千葉）

さくさや見えり（のこぎり）
（のこぎり）ゆゑとへる

毛づく

鶴鶴と云

王荊

詩山鶴抱石映松枝（並餘花同）
寂（ま）く有（ま）く風（ゆ）（寂寂冥冥吹香渡）

名物人和のむしや集よへと鶴と歌
さう全芳備祖よへ鶴鳩代新よへうり
毛衣梅 東坡詩二月驚梅曉幽香

此比無

家移入通

風雅集十五定家鄉もや
すんぐる家からうえてかくひぐ
けうみうぐうそて竹をうめな
れきくよしとへつづく

永福門院内

まくまくの扇へりくふねあら

うわ行かふりよしおえ

夕天而立高

色原かあうま引くの柳をも

まくまくとく人天まとく

卯月そくうふくそく

杜牧詩

葉紛於二月紅とみれ或入新綠曉

たくまくとく

池より蓮

謝東運序山よへて東林

れ池とりうまとくまくまとく

すくのむくれとくまくとくもく

三ノ同義叔うり

うそくにわうり

家とくゑゆ

とくひめ

ましらう

格段に古くわぬみす

むらう

物らうす第へうりようじゆうじゆう

とくさう

とくさうあまくも色うけうけうけ

もとふ

紫苑くわいりくわいり

えんじく

うちこゑとく続うり

使衣

ましらう

ましらうの事まき小内うれとく

竹もくまくまくまくまくまくまく

アシナ

鷺脇くわきくわきくわきくわき

我やうのむらうのむらうのむらうのむらうのむらうのむらうのむ

のひうきんくわきんくわきんくわきんくわきんくわきんくわきん

黄菊

月令か萬まき萬まき萬まき萬まき萬まき萬まき萬まき

衣の黄からとこまく

ウヤ

白鷺くわきくわきくわきくわきくわきくわきくわきくわき

うきうきうきうきうきうきうきうきうき

物て水表ももうけゆくのひをまく

人まくさんとくうのちうのちうへゆく

三十六

あやめの歌うとへ多おのせまふ
あくよみのゆゑ多くへまうもつ
うきよめへととくんとへく
ちくわくわくうまて、わく秋く
えちくくすものとあくとぬよわ
ひすりゆよ、流へ水かくづひわ
じくづけんじふくゆくく朝夕
きくそるはきんゆくわくわくかく
けむりくわくわくめりく

歌抄

山谷詩遺金滿胤常作

哭休波將軍、歌と萩族故曰かわ
りてせんぐのわうりとさうに辛

歌人奴うりとさう

悲田院の音ととんの俗謡へこ浦れき
うとうやううのとまちうりきのと
うとうてやうととてううのとま
はうとうのとまうりとまうりとま
をうとうとまうりとまうりとま
いとまうりとまうりとまうりとま

九

妻人 美いよあすみのゆきよもう
まくさへはんが 日本マニトシナリする東征ミコト
時橋アツカヒ海シマひづりてふとすくの
りうきほしてあととくらん橋アツカヒ
ウトアツカヒとみの少アツカヒ者アツカヒやとひめの
りう東アツカヒわいりとりふ日本記アツカヒ
えひとくと頃アツカヒ和名アツカヒの支那アツカヒ
てき歌アツカヒとくらんとくじとくわとく
ちよかアツカヒさくまふやひととたま
しやくとくらんとくじとくわとく
すそんアツカヒをねとくとく
えきとく合アツカヒりアツカヒ
の葉アツカヒを抜アツカヒて云アツカヒふ
うちあくらううのとくわくをう
うかく小アツカヒのとく子アツカヒあくとくとく
くわくとくわくとくわくとくわくとく
うそくわくわくわくわくわくわく

ふとくのゆきのうるのあもん
いのくわのひをあらうかのうをさわ
くまくでかがれのうじまわう
えんやおまえのうじまともるらしそ
ねあまくわのまくわいよとまもとるら
てくまのうじよとまもとるら
きくそやくしめくのうじよと
くくらぬれとくくのうじよと
くくらぬれとくくのうじよと
くくらぬれとくくのうじよと

もくらまくらとくらへとれあくらつてやも
とくやり民とくとて農ともくめへトメ
利わんすくくひうみへくへ新食よ
乃はくううきくもくとくさくくく
そゆのとく人とくくく人

人一云 湯波^{湯波}石^石人廢^廢
り東^是のとく

すとく

白民文集偶吟詩眼下直
衣氣^ト有食^ト中無^ト亦^ト空^ト如^{スル}
身後有^ル行^カ更^カ應^{ミタ}向^{テスヨノ}人間^{カニシ}
生^ス來^ス靜^ス

念^テ口^トは^ト涼^ト用^ト自^ト用^ト達^ト禪^ト客^ト小^ト低^ト
頭^トは^トあ^トサ^ト洋^ト、^ト衆^ト興^ト一^ト歲^ト竜^ト門^ト
教^ト度^ト造^ト、^ト所^ト石^ト集^ト和^ト四^ト八^ト詩^ト、^ト而^ト
すとくとくとく人の一^トねとくとくとく
て^トり^ト鳥^ト下^ト帛^トへ^トり^トとくとくとくとく

人一云

清溪書^{清溪書}吳祐

順帝^{順帝}時^時遷^ル膠東^{膠東}侯^侯相^祐政^祐惟^に簡^簡
以^シ身^シ平^シ物^物吏^吏民^民懷^{ヒテ}而^不欺^{シヨク}薦^薦史^史
孫^孫性^性私^私賦^賦民^民旅^旅市^市衣^衣以^テ進^ヘ其^其父^父

文淵而怒曰有君如此何惠歎之促
汝伏罪性慙愧詣阙投衣自首祐
屏處向其故性悽愴言祐曰
掾以親故受汚辱之名而渴觀過
斬紹仁矣使汝謝沒還以衣遺之
人恒恆也

孟子梁惠王上

篇曰士恒產而有恒心者惟士為
能若民則安恒產固士恒心苟
無恒心放辟邪侈士不為已及陷
於罪然後從而刑之是國民之無有
主考未之有也

仁人有位固民而下焉也是豈明
君制民之產必使仰足以下克父母
俯足以下富妻子樂眾終身飽五年
免於死亡然後驅而之焉故民之從
之也輕云黎民不饑不寒然而不
生考未之有也

人之生而生之謂也

家傳云歎窮

則擢鳥窮則鳴人窮則詐湯窮

小人窮則詐也豈生之有也

凍餕

孟子盡心篇。西漢西伯魯齋

老者制其田里。教之樹畜等長。
五十使蚕其光七十非帛不綴。
八十非肉不飽不煖不飽得之凍
餕。文王之民也。凍餕之老者此之
謂也。

人代汝事のわう。汝のつぐくら
まうる人のけうとく。そく肉ゆ
てよきんとくいふかあく。おとくやと
わうきんへあく。おとくわとくう
けすりあく。おとくよひとく
きうこもじく。いわくらむとく。もん
の日うち。おとくよひとく。もん
のよひとく。此とくは精化人ともりとく
しん物すり。士ももくもく。くの
とく。おとく。おとく。人のよひとく。おとく
く

仁厚

性情とまのやすい

おとく。おとく。おとく。おとく。おとく。

ハシヒロウカウツアラカミテ
「うきにトムクムツウツ
梅^{シナ}尾のとくらととひもがくよけ
て馬^{ウマ}トモトモトモトモトモトモト
と人ミコモリてわるみキヤ高枕^{シユクシナ}
軍^{キル}のくろ、ちま
いうちんの、鳥^{トリ}あまくよた
やくゆうり、うその、ほさん、府生^{フジ}
乃^ノ馬^マよいと、音^{オノ}きりこへりて、
かうまや不^ハま、とくあまくわ
すとあう

天^{アメ}は風^{カキ}とくつれとんぬいと
のくわくわくわく
梅^{シナ}尾の人 明惠^{アキラカ}トモトモ

辨^セ

翁^{シロ}九^ク軍^{ムサシ}の^ノ人 布^{ハシ}生^スて、修^ツ練^スも
多^シ切^{カツ}徳^ハの^ノ軍^{ムサシ}して、今^ハりまと
き^ハくとく^ハ、又^ハしも^ハ、^ハき^ハも^ハ、^ハき^ハも^ハ、^ハき^ハも^ハ

すとあう

府生^{アキラカ}、城原^{シマツカ}下^シ、云^ハ長^シ、之^ハ清^シ府^シ生^ス、
大將判^{シテ}授^ス之^ハ而^ハも^ハ大^シ、不^ハ名^シ仕^ス府^シ

生^{ナシ}ム^トノ^トル^カ加^ナ府^シ生^セ也^シ又^ナ有^リ
あ^リ自^ラ若^ホ其^ニ無^シ也^シと^テ府^シ生^{アリ}

阿^ハ字^本不^生

大^ナ毘^ニ盧^シ舍^ナ那^シ經^ニ有^情

及^シ非^シ情^シ行^フ方^ナ一^ナ念^{アリ}又^シ我^シ覓^本

不^生

新^シ羅^ニ圓^シ靈^シ妙^シ寺^シ信^ナ丁^ニ忍

識^シ釋^シ曰^シ秘^シ卷^中秘^シ釋^シ者^シ阿^ハ字^自

說^シ本^不生

『^シ浮^シ泰^シ行^フ重^シ躬^シ少^シ下^シ節^入道^シ
軒^シと^シ馬^シの相^シわ^シく^シう^シつ^シつ^シ
ん^シく^シい^シの^シく^シと^シく^シぬ^シく^シ』

タ^シの^シう^シ行^フ於^シ馬^シう^シ行^フて^シ了^シ
タ^シう^シ西^シ長^シ一^シ主^シ和^シの^シ
ミ^シ人^シの^シう^シと^シつ^シの^シ相^シく^シ人^シの^シ
の^シう^シい^シと^シて^シり^シも^シう^シて^シ沛^シ
え^シり^シう^シあ^シや^シう^シう^シと^シく^シ云^シ

沛^シ

文^シ遷^シ藉^シ田^シ駢^シ驥^シ騰^シ驥^シ而^シ沛^シ

跋^ト注^マ行^見

は初^トあら^シせゆん

深^シ氏^シ相^シ烹^シよ^シも^シ

ウ^シと^シり^シき^シ

うへあやうう
きな

ゆきうるおもよひのうてとまき
きはれやうじてらさんとわん
よもいもあめりとひといふ
相うちのなされへ傷害シナガりかそと
れのとくえうすてうすじを
くせりへうてうのまことと
くまくまくらへうへうへやう
くまくまくらへうへうへやう

筆 父氣を取る後雅定云孫頭通
郷子し山口

あまうりてうのうり
二年天台空明や僧行とは行
まれゆ少人招請アラフう十一月十
九日木名義仲共シ卒して行
寺後とさりやう僧正を馬よみて
通んといふと本多う大持
橋高弟就應アラヒう矢よ口腰の
をひといきてういさくまにあ

うのまをあくへぬへそつと
親忠の弟が爲めにうのとれ盛裏

記三十四より

冬宿わくとてこうりつれの神よみ
をさんわうこつとしのひのひ
やううう格式おゆもすみひ

茶式　後醍醐天皇ノ時弘仁格弘仁式撰
と清和天皇ノ時貞觀格貞觀式と
様と院祐天皇ノ時延喜格延喜式
撰へえと二代格式ニシテ傳之令と

よききて明はかし性士とく
軍の兵人方よ身とくとてこ里と
やうゆきと氣れすわうゆこす
今

四十人

明嘗冬経曰男子三十以
上不^テ下不^テ不冬三里三里并以^テ下^ス也

セ

康革と龜よりて^テアヒルのう
あわてて龜よりて^テ阿ヒルのう

康革

康^スアヒル角^ス本革云不

以鼻嗅テナガラ有小白虫視之不見入人鼻必為蟲シハナリコクイ穎藥不及也 頸碎錄云鹿茸麝香肉蔻荳切石就

鼻用蓋有微蟲

然とつんとすまへせりんりとふ
まひくよもくまくまくまくまく
かのそりやもくまくまくまくまく
うりとてよつてよつてよつてよつ
魔毛のひづれいよるはく
くわくわくらこの中のよつて
くわくわくわくわくわくわく
かぎれとよふたけよくらくらく
せきよくせきよくせきよくせき
なぬひづれにへはくとじれに
うりゆくわくわくわくわくわく
多くのよ天下わくとむく
ともくわくわくわくわくわく
乃雅鷹をあくまくとくまくち
へくまくとくまくとくまくとく

持せられへせれとせかて多代師と
ちよよげ道のりくらへ

後國くわくのりくわく 一向初の時

りよひとゆ

まきとゆ

くく瘡破すすじてと云ゆ

天性との骨

まきつまんと用

なきと

泥ナカニとへるを

瘡破

瘡破よすくと用

ちよよ ちよよとくはく まきとくと
服瘡 二字とくに玉ノ子の如原と

きよよとく

はくとく

故瘡セトキヘ そくきセトキ

せりくセ 悅々と云世人わもりと

りよく 善珠達師の光明皇后尊号

や折門とて唯御シモリトモア

くうゆ日本ノクノ和原といふ

とまきはきて玄月のあづまに
ツツモリて瓜のうだとき簪髪
そりをもつてやうえんの度
くこゑとわうやう

武のいふ年すみやうとしてとす
かひきよん底とどもくへえじとを
んうへえりあもく、老人のす
きくもえんうれふよまつるる
もあひきよんうへえりうるの
くまへやうて勝りくわやく
わゆうえんせ活乃くわらさう
てくやうぐとくはうひゑひくく
むくんとくへゆくとくとく
もおとくれへわうううう
てくもくくくのくじとく
くやんすくわううう

本草より

論語子罕篇

後生丁畏^レ正^レ知^レ来^レ者^レ之不^レ如^レ今^レ
也四十而無^レ聞^レ正^レ斯^レ亦不足^レ
畏^レ也己^レ 大戴礼修身篇曾子曰

年三十四十之間而音氣則音
矣五十而不以善聞則不用矣七十
而未壞雖有後過亦可以免
矣

ゆゑにわざんとへ
ひき氣の本
むらくまくとへ
行うへ

栗寺新^{シマツ}也と人際かより肩もく
ぬくにいとへあふきみて日暮

すくきそりやうと西國も内々
わらゆるのうへりそくはりの
ときそくわらうるへ質問ふもとんて
年れそりそりそりそりそりそり
口ふりのあくゆもそくそく
てもそくそくそくそくそくそく
みそくそくそくそくそくそく

栗寺 久和國小笠山セモヒテ

拾芥云々天皇天平勝寶元年

創之至天平神護元年十七年

遊舉 詳續日本記

西國寺門人

宣衡云へた府云衡云

八男入竹林院と号す

資相

權中納言位檢非遠使

別面後醍醐天皇時人(日第後)

光卿三男

毛内

莊子小龍乃家

毛内入道りてよしと

毛内入道りてよしと

毛内入道りてよしと

毛内入道りてよしと

毛内入道りてよしと

毛内入道りてよしと

毛内入道りてよしと

毛内

毛内

毛内

毛内

毛内

毛内

信應長元年依勅撰玉葉集正

和元本奏覽之月二年十月十七日

荆安同四年十二月十八日東使

て江ノ島の海人流罪をうな御役

よんとく 現在は高氣純後流
も和木之前とまんぢ流也
よりとく やめんておえ二
半身もく 風雅集より東東(一
ぬうううよやと月とつうう
よそり
やと月といて、うなうへうれん
うううせのううとせ
六波若 小糸ああ人の一族と京都
よそり
よそり身内を興へ故と行ひも
とぬとは筋とそと東遷よ解
の人事も門よゑ向ひやらふう
従はゆるへゆるものわづようけ
あううもととゆらひゆんちうを
つてううむろくとゆらひうとん
ひをすうよとくうとゆらひう
わくうやくうやくうのうとゆら
くうううかくううのうとゆら

よきよきのくわよへもよきよきよ
てくらはまこり向ひ木とく
もやめ折わとくもとて木とく
こうりうへかのくへゆふをとく
うと無くわむくへんけよくとく
木と木とみるりとくもとく
くらまくらまく
ひく薄羽はくとくはく薄羽の
たとむくひくひくひくひく
まくのくまく

汗
まく

あきらんへと種をともす
まくのくのくのくのくのくのく
うとうとうとうとうとうと
そくそくそくそくそくそく
うじうじうじうじうじうじ
のみみみみみみみみ

の御内裏を詠みつきてゆくと
のんじゆりんに秋風と云ふを
くぐるのうはるはれやんとし
えこして後多にうるをそ
く秋のゆかへゆきまへやそ
多のゆかとくらむりとく
秋へかよひねへ則きうり十月も
小春は天草とくらむり秋もほ
りとくらむりおとせんあらわし
よへあへ下へうつりてつりへく

てもうううじくと氣下よまをう
ひまくらむりつてはるへまむ
高見のううじくとまくとえよま
ひまきへたゆきとまくはさてわ
れ幼いはくととよひおひら
とくらむりへふやまく
おとせんりよかくとてある沖
乃ちくらむりとせんとせん

枝尾と玄冥の佛事も小出づ

耳少しある

漢書張良傳忠言

延年

生住矣藏

藏東流教曰四相小康納
り生老病死の康代すわく生住
矣藏へ細乃の相く生へじすれぬ
まほへへらに看住てももとう
矣ハ病とてよきて矣形ようう藏之死
ちや

とく川の

倫紀子罕篇子在川

上逝者如折木不^レ含晝夜程子
曰此道體^レ天運而不已日往則月
來寒往則暑木水流而不息物生而
不窮皆^レ道爲体運乎晝夜未嘗
已也

真俗 真出俗間俗せらく

主として後 六韜云春道生万物榮^レ
夏道長万物成秋道欽万物盈冬
道藏万物靜盈則藏則後起莫
知終莫知始

秋へかく

トクもあら小秋へかく
シムシムのむらこゑ

小春 初雪化冬日其暖ヒヤシ故謂之
小春トクモニ支文教衆前集十月八日より
えくわ

四季へかく

四季清早ヒツヨウは四序

と云ふ節序と云ふ也

春のうる宵ヒナノ人天ヒタツとてわと
人天ヒタツのよしとては夜ヨメの東ヒタツを

夜ヨメのよしとては夜ヨメの東ヒタツを
とては夜ヨメのよしとては夜ヨメの東ヒタツを
とては夜ヨメのよしとては夜ヨメの東ヒタツを

春のうる宵ヒナノ人天ヒタツとてわと
人天ヒタツのよしとては夜ヨメの東ヒタツを

の夜ヨメの

春のうる宵

春のうる宵ヒナノ人天ヒタツとてわと

元丸ヒラマツ小山のねえへ御三院ヒサミ院

白志ヒロシ二男法性寺ヒツヨウジ院白志通

えくわ

東ニ東反

拾芥中、未云四魚院近

生、乃武、重明親王家、二條南町西

南北二町忠仁云家貞信云大入道

多傳久多入四年四月毎日焼失

某處へ地かゝき樂多とされへ多
とされへ拂ひてゐる所は少くのぞ
すとこころありふる所ありふる所
もとたゞとてあらざる事より一
々と多く行ひておほのよもや辛

尔して多幸のゆとあらましゆともあ
マリとひまともとひまとひまと
ゆまともんや毛剥うて毛剥う
ゆまとわざととせ前ひまくも
ととくは成りてかこひらも
毛業がうるさきやと散乱りてまく
毛繩床、壁せへねりてて禅室
うちく事理をうるさくへん相も
うもし、うれの内能必熟ともうも
往こうてひりうるをと多くもじ

今

柳子之文多矣 大境肺病不復

小之文也多矣 双六不復

不復

不復人戲と 論云不復戲謔乎不爲鹿

也

聖教 綱論等之云

りのまへ 白化之云

卒余 演繹注卒余輕遞之見

繩床 梵網注善惡十八物也

李白草書欵竹宣川石硯墨色光
吾師翁後停繩床 謂懷素理
事不同各別之而一編著之
事之理淺事深之而一編著之
理不二二之合家之倫 小相不背
內絕少熟之公私惠山之信教常使
画りもとすうじゆうのえも
とあくらのうのうをうしゆる小聲あるとあく
いこゑふくうすととづくやうんと

中魚の如くあへれ魚道より流と
せし物也

瀆當 韻會當丁浪及底也韓子玉危
音韻注云底

魚道 下字集云魚道建殘盃也以餘
瀝洗盃痕喻之魚過舊道而曰魚乃
也魚堆游游入海終不窩旧道
老多久也未詳

魚道之謂也似之也勿
仰んじて魚人仰んじて魚人
わざううり
魚道之謂也似之也勿
仰んじて魚人仰んじて魚人
わざううり

魚道之謂也似之也勿
仰んじて魚人仰んじて魚人
わざううり

和名集云崔禹錫食經云河貝子
和名美稱俗用鰐字非
七音奉連鰐虫屬兒也
殼上黑小狹也變

外考

門外韻之謂也勿
仰んじて魚人仰んじて魚人
わざううり

幼名なま小海こみの二番様にばんようのりくらと
のうのえ見みめかく板いたあくつもよ
ぬやぬやも

すくねすくねとくもとくとくもとくにほすす後ご
後ご廢はい廢はいとくもとくとくもとくにほすす後ご
すくねすくねとくもとくとくもとくにほすす後ご
すくねすくねとくもとくとくもとくにほすす後ご
後ご廢はい廢はいとくもとくとくもとくにほすす後ご

頬ほ

揚あ字じ上じょう後ご後ご後ご後ご

よまのすくよ頬ほのりくらと
わう半はんあく板いた小海こみのりくらと

とくもとく

めうとくもとく

せうすきり志し

とくもとく

平ひら後ご

とくもとく

渡わた广ひろ

渡わた广ひろ

燒や燒や

燒や燒や

瓶び瓶び

瓶び瓶び

瓶び瓶び

とくもとく

摩河^カの先迄行きて摩行^カ也
葉^ハんと^カ

清承寺

東山も^カ食^シま^ハやうわう

拾芥下木云^カ此^モ御^カ行^カ建立^ス
衣^カそ^カう^カを^カり^カ有^カ半日^カと^カ時^カ
心^カ後^カす^カと^カ之^カ多^カく^カ有^カる
も^カや^カた^カも^カ

是^カ ひ^カん^カ半日^カを^カと^カ

遍照寺の東仕法師^カ也^カ日^カあ^カ
のは^カと^カ事^カの^カら^カま^カえ^カと^カま^カる^カ

戸^カあ^カれ^カへ^カね^カも^カひ^カり^カ
き^カり^カれ^カ候^カと^カと^カり^カと^カと^カと^カ
そ^カと^カと^カと^カと^カと^カと^カと^カ
ウ^カと^カと^カと^カと^カと^カと^カと^カ
て^カと^カと^カと^カと^カと^カと^カと^カ
マ^カと^カと^カと^カと^カと^カと^カと^カ
ち^カと^カと^カと^カと^カと^カと^カと^カ
ち^カと^カと^カと^カと^カと^カと^カと^カ
使^カと^カと^カと^カと^カと^カと^カと^カ
ひ^カと^カと^カと^カと^カと^カと^カと^カ

之而丁卯年八月十九日乃作

遍照寺 榮芥云店次修造也 庚辰

佐多寛経付寺彌繼より

は應 檀那寺住庵別あわう御承

乃えき

卷後 久敷代一门奉具凡二事

左衛門太字然とくとくとく
陰陽也とくとくとくとくとくとく
ち入道門仰へとく半う自言ひとくとく
くわきとくとく印記を系因白るより

左衛門太字然とくとくとくとくとくとく

左衛

業達セ云六壬天十二辰之名

古人釋其義九月水丁為殺
幹故曰太衛者日月五星所
生之门户天之衛也

吉平

安信晴明吉昌先主計

頭陰陽博士卒八十九年

左衛門太字然とくとくとくとくとく

日よせんとくとくとくとくとく

左衛門太字然とくとくとくとくとく

心をまかわすもむかへて
まかしにまかはせば、世間のほ流の
まかし地のまかよ。先まかく清め
まかとこまかとまかひのまよ。
益ハキマリヒツトシトシ
ウタハムの取ハムマリヒツモヤウ
ルカケル。ゆくとカムヒツシ本も
ハシヒツクルのアハキの信ヒツテ紙
皆よあくシ人ナムヒツシムハラク

我俗 犬凡俗一本に属ニモアモウ我

族敷カシト

人間ハリシテノハアフリムトアラヨミ
ハリヘ吉佛ト化ツテモ多ヒ金取
珠モのまくとソリムニ重塔トミテ
トスハリシテノハアフリムトアラヨミ
ハリモトトシテノハアフリムトアラヨミ
ハリモトトシテノハアフリムトアラヨミ

古佛

真和集、元吉佛頃、一章草

生一如來六出圍、唉臉同識得。
鶻轉元是水摩耶、言事不授胎。
子元佛光國師祖元、又言是磨
吉布翁。さわうも言してその様と
ゆうく又漫文潛戲化。舌柳、絶句六出
極成百歎王日引出後便帛。あ擣
眉柱眼人誰怕想汝應無熟肺腸。
空して御もとづくらうとぞくらう

安國

ニ言ふよ

とくとく云

一馬よのづきりんわるるれしり
かのくを參じたまひくへく
そくはのト。れどにまく
やうりやうりもくほひや
わくえへあるくや
そろさんといのてわくのん教きと
まくくくまくくへ角ありまく
角をやくを牙うくのこくとく
くくくくのうく人くくへ舌よく

もやくわそへてはく風油とひ地よみ
りくらむあつてんうきうすく思ひた
さくア魔のすゑれくふくえ組
乃ちまくてもんぐよのくわくとくら
人へそそのくよせゆく、うる
日でくのじのじかうつへそく
もとくのじのじかうつへそく
ひはくわくのくわくのくわくのくわく
人へそそのくよせゆく、うる
ひはくわく一通
ひはくわくのくわくのくわくのくわく
人へそそのくよせゆく、うる

ふきくはくはくはくはく
やくやくはくはくはく
わくわくはくはくはく
わくわくはくはくはく
わくわくはくはくはく
牛羊ひたひ虎狼
ねがのだふくひとくとく
ひくひくはく
ほくほくはくはくはく
そくそくはくはくはく
きくきくはくはくはく
きくきくはくはくはく

萬千人罪ありとい
世榮

おもれ

卷光源氏物語

もくじまつり、むちうぐ

志常小みそて、美いよそと

してこわう、曲礼志不可、満樂石

極

年もそむ人一生すれあやひ
てこえ人のらふかはせふ、ソルニトヒ
ムクヘモクヤミトテイキツモロ
ハシラヘラハタキソシモモモモ
チホのうえへ一生ゆくとくお

うとつうともいゆへきく
きりくがてまくんたくまく
とをすくよのじへそくりゆ
だわくわくとえうわく
まくとまく不へる、じまくとまく
じまくとまくのあへれぬとくらう
とくらうとくらうとくらう
わくわくとくらうとくらう
とくらうとくらうとくらう

まことにすくらへ 一生をもとめて

まことにすくらへ

むのとよひ後嘗歎ひのふと
ひきうりくらふとくにねりとく
あかりと人のゆゑふ禮門院の
まつは鳥羽院の印伝は後又アラモ
ミーあくとよひよせぬともアラモ
テリトハタク

後嘗歎院

人主八十七代(ま印)守

二皇子

禮門院

多金院院承承子(キ)清

姫(ヒメ)

右系

藤原伊行(タケハライノリ)子平賀盛

つとめ(ツトメ)

右系(ツトメ)の人のびるよ
ゆのうり用うりて行うりとくとく
とくとくてくつやくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとく

臺のつりをひいとまうる
はなづかとあんわへゆる
よのさんむすびへじくり
くふりんのまことゆるも
まへうらもりにゆくいふんこの
まうりはりらぐへ院信もんの眼
おもきまくまくらうのこくうたふ
人のあうてのうへやわらぎへてぬ
まゆのまゆえよもぐくせんを
ゆへゆへゆへゆへゆへゆへ

人へり んのり らう 満遊の游の
有澹臺滅明者行不由往非不革
未嘗至於偃之室也

不^トうアシル

紙と忘月

しゆり

院信のまよもと

竹林せ貰ひ

晋書院信字嗣宗不拘礼教能善書
白眼對之及悲喜來吊舊作白眼

喜不懌而退。喜弟康聞之乃齊酒。挾琴送。至。大悅。乃見青眼。由是去禮之士疾之若仇。當時。辛棄。獨駕不由往路。車迹。而窮轍。慟哭而反。

且。と。む。り。の。終。の。終。の。終。の。終。
か。ら。秦。晉。乃。し。と。と。と。と。と。
よ。し。の。う。る。と。と。と。と。と。と。
わ。く。ひ。こ。う。と。と。と。と。と。と。
か。り。秦。晉。乃。し。と。と。と。と。と。
よ。し。の。う。る。と。と。と。と。と。と。
わ。く。ひ。こ。う。と。と。と。と。と。と。
て。い。あ。あ。と。と。と。と。と。と。
ほ。め。か。れ。と。と。と。と。と。と。
と。と。と。と。と。と。と。

くりこゝもやてどくれをきく
くのひとし時、りそとくらふと
くし風、わたり、涙ようてあひと神
めうとうへまううんうと醫
書かしく、國のうり人ゑ然
と角もとくに、國とくに
やくと化もとくに、うるせんともく
うううううううううううううう
うううううううううううううう

棋盤八角よろとく

後漢書梁冀

傳、冀能挽滿彈來。注挽滿、措引強，
也藝經曰彈暴。兩人對局，白黑暴名。
六枚先引棋相當，更先彈。其局以
石為之。事文獻錄前集云：魏文
帝善彈，暴能用。辛巾角時一書
生於低頭以冠。葛巾撒暴。

毛

毛

毛

毛

毛

中庸子曰射有似乎君子失諸正
能及水諸其身

清獻公

言行錄後集五趙抃清獻

二字國道衛外人奉進士事仁宗
英宗神宗官至參政樞頴趙抃
氣貌清逸人不見其喜愠自号知
非子為侍郎史彈劾不避貴勢
京師号為鐵面御史皇朝類
苑三十六云馬瀛王詩雖凌近而多

義理曰窮達皆由命何方設嘆声
但知行好事莫要問前程冬去冰
須洋春來草自生請君觀此理
天道甚分明

陸龜必

論語

達人不服則修
文德以求之既至之則安之注內治
修然後達人服有不服則修德以
求之亦不當勤矣於達

用

本草序云真誥曰常

不能慎事上者自致百病之本而

怨咎於祁雲平富風卧湿及責
佗人於失覆皆廢人也史慎事上
者謂奉勤之事必皆懊思

之化 儒化

禹治九州
書大禹謨帝曰咨禹惟
時有苗弗平汝徂征禹乃會群
后三旬苗民遂命益曰惟德勤天
無遠弗届禹班振旅帝乃証敷
文德舞千羽干兩階七旬有苗格
蔡氏傳云三苗國名在江南荆揚

之間恃陰為亂者

禹見苗于血亂內小禹曰
情欲枉身而自殺
禹曰勿以美慕而忘本
禹曰是也禹曰若以
禹之德而自殺則禹不
之見禹曰吾情莫如是
禹曰百年之後我必

金とくづくつたすを稱づつて
力はるゝ事無くんとと思へ
とすきりしてのうとくんせか
くらうとうめぬりやういへう
え时ひ一ときもくらんて感へ
もうへわくまくらんて感へ
くらうとくらうとくらうとくら
くらうとくらうとくらうとくら
くらうとくらうとくらうとくら
てきりとくらうとくらうとくら
てきりとくらうとくらうとくら

くしてゆきしれむくづくよゆくづく
ヨシ大師へ　清夜曰君子有三戒者
之時、血氣未定戒之有色及其
杜也血氣方剛戒之有勇及其
老也血氣既衰戒之在得

情欲　七情六欲

玉
韻府張九齡議論

如_レ下坂走丸

義廉とこゑぐれ　戰國大経云子の内
意とわざと拂廢とくん破壊と

簪カニツミ—唐の才子の銀鞍白馬千金城
眉と眞のまく

吉ハシモト　画無大年み

そむんへくるのありうる
あたへるまゝにうつてはよ

百年の男　白氏文集中四新樂府
井底引銀瓶ウチヒキヘンブ云者君一日恩誤エヌモク百年

身

わくをもくかくして　年よりてと
枯木かくく氣血淡薄カククキセツタムルしてやふ

感動もくよもく

小弔コヂ小町コマチ、トモモリトモリト
モカクスヘテクミヘシヨトツヘタ
人まくらひえり、フナリトツヘ死
ゆゑも高野タカノの山ヤマの、色カラ白日絶ヒツヅル
すうじ太郎タケイの馬マサひくヒクせん
ア小町コマチ、さうりたあこい、とほのも
わねむりく

玉造タマツヅとく文

も遠小町子忙裏書タマツヅ
戸行路ドウジンロ之次歩道ボウドウ之間往アガフ、途ト傍ラニ有

一女人容貌憔悴身體瘦弱
向女曰汝行鄉人誰家之子有父母
外女嫁人者曰吾是倡家
之子良室之女孝順曰吾是倡家
日愁離猶深文繁少

清行安信清行之名清行也
すくよこと若清行也くよせよ善
相云とくいへそく淨藏貴取りえ
も文章多くや明文粹よの
ア美なるを志く寛平と義徳の人

高節大師弘法大師（大師附は
傳并元亨著書半一詳）

小畜（小畜）大畜（大畜）小畜
よきうきのうとくちゆうつひのれふ
きくりぬくいへい（人本わがう
中よきあめのじきり氣味ある
てこゑあらうとく一そくの通とく
すれさんをとくりのまんと

絶えぬ人といふと云ふに似たのう

せにへづるとのやうにへどわら
いにあればすくともものあ
まと與ともうすのうゆとしん
えのじふかわすとてとくと
ときもん人をかくしてとくと
ふくとすくはうてとくと
すくのとせとへうりへうりと
らはむむむとてとこまくと
えうんと見まくとめうの病者と
ておはなとおはなとおはなと
えひがくとくとくとくとくと
ほりとれいとれいとれいと
せんとくとくとくとくとくと
じくとくとくとくとくとくと
じくとくとくとくとくとくと
じくとくとくとくとくとくと

てはくとくらんわや
ふもとえぐ人のことてんくうを
アシカの入る山ある山あ
くもくとくの山もく
きくさくしゆんむく
ゑくわざくの山く
おんとむりくにせこひく
りくとくまつるいんがく
きてくらくの山く
くもくとくの山く
父の山く
くくの山く
くくの山く

て
緑うわら馬車りうわらてもやも
ちつ物ふのくみんとくら
るのとけいじのとくらじ年
をとくとくとくとくとくとくと
むけくとくとくとくとくとくと
をとくとくとくとくとくとくと
をとくとくとくとくとくとくと
をとくとくとくとくとくとくと
をとくとくとくとくとくとくと
をとくとくとくとくとくとくと
をとくとくとくとくとくとくと
をとくとくとくとくとくとくと

戰
戦の面とまへ百葉れじ
ノモムニの高へ酒けうれも
とととととととととととと
とととととととととととと
とととととととととととと
ととととととととととと
ととととととととととと
ととととととととととと
とととととととととと
とととととととととと
ととととととととと

てくらむと見て月の下を歩
りあひのまへるのじにや
うりてすかのうりはけ
りかへるのへきてうわくら
とまくらもしむらわ
くらはてとくらはくらを
くらはてとくらはくらを
てゆづりてとくらはくらを
くらはてとくらはくらを
すのくらはくらを
くらはてとくらはくらを
くらはてとくらはくらを
くらはてとくらはくらを
くらはてとくらはくらを
くらはてとくらはくらを

正とうへんもひじらをもあはまのて
やきくうしるひとひそひくとひ
ゆもこわとひそひくとひ
うてあくうへようとひそひくと
毛むのありそひのうとひそひくと
は

あるのせ

孟子雜事上 之 慢酒

モルリ 裕而強酒

孟子雜事上 之 慢酒

モルリ 前漢書 盖饒 宽笑許伯入屏曰無多

酌私我則酒枉並相醜侯笑曰次云
醒而狂行必酒モルリ 又酒之美名と行
矣と云

飲日暮て私モルリ

高酒モルリ さ

私モルリ 莊子宿醒三日不已 晋
書劉伶曰天生モルリ 刘伶以酒為名一飲
一石丑牛解モルリ 醒說文醒高酒モルリ

生モルリ とてモルリ 高酒モルリ

なり 辛方ううり

却へ國

矣か

わうわう
わうわう
すねひをひうけ

ひよこ

ぬもんへ くらりくへ 露明

ニハユニ

みちくらしき

きのうめ 万葉よ

きのうとくのくも雨のく
きのうにすくくわくし

きのう

きのうにふくもくとくもく
きのうにれふくもくとくもく

寫書喧嘩

白樂天答勸酒詩云真怪乞本邦
不飲絕廻因醉却沾巾誰料平生
狂酒客如今變作酒悲人

はのむら 疾化

名もいとまか 実として喝吐

八郎

百味の豆 云漢書食貨志丈鹽食

者之將酒百萬之義
憂ウツ之ノトトトトトト 東方朔ウタカ傳銷憂若
莫若ハシモ 古樂府コクブ行ヒツク以忘憂唯有
杜康トクカン 杜康善トクカンシキ造酒故為酒名
すストトトトトトトト 詩云憂心如醉ウシキ
云憂如醒ウニスカ

後アフタの世セ、 とよけ世ヨリシテの室ムロ
後アフタの世セ、 云今生コイジ生後生酒アフシウとのり
りリとト 徒生礼漢トクシラカン云恒ウニスカ眞恚
毒害トクセイ火焚ホルニ燒智惠慈善根セイセン

万ミリ戒ケと破ハラフ 飲ウ酒ウ戒ケと破ハラフ

自除ハラフ戒ケと破ハラフ

酒ウ

而アリ 梵網經ボンモウジ心地ハシマ門ムン不ハ云是シテ酒ウ起罪ウカシ因
緣エヌ而アリ善シ薩ササ應エラシ生シタシ一切ヨリシ死シテ明達モダク惡エヌ
而アリ更生シタシ一切ヨリシ死シテ顛倒ハラハラ之ノ心ハ者ハ云善シ
薩ササ波羅乘ボラシ眾シテ又ハ云若佛子ヨシモニ故ハシモ飲ウ酒ウ
而アリ生ハシモ酒ウ失ハシモ量シテ若ハシモ自身手過カタマツメ酒ウ
器カタマツメ人ヒト飲ウ酒ウ者ハシモ五百世ハシモ生ハシモ平ハシモ何ハシモ况ハシモ自ハシモ
飲ウ亦ハシモ不得ハシモ教ハシモ一切ヨリシ人ヒト飲ウ及ハシモ一切ヨリシ死シテ飲ウ

酒况自飲酒者故自飲數以飲者
犯輕垢罪孟子雜章下禹惡旨
酒而好善言注戰國策曰儀狄化鴻
島飲而月之曰後世必有以酒亡其
國者遂疏儀狄而絕旨酒

月人也吾亦人也又云之
陳鳴長恨飲傳驪山高夜上陽花銷
未免一醉也

李白月下偶酌詩花間一壺酒
酌無相親舉孟邀明月對影成三人
又楊誠齋月下傳孟詩鶴林正
病予凡乞乞謝惠連雪賦梁王
避於免園乃置旨酒命賓友天
寶遺事王元寶每大雪掃雪同
往遠客飲宴謂之暖寒會李白宴
桃李園序同瓊筵而坐花光羽觴
而醉月白樂天詩花下忘歸因笑
景極前勸醉乞垂風

人見き 中南 南南 素ノ時此

書

火のものより 宋龜山夜雪詩一

炉柴火三盃 酒誰記山法有戴達

空れ行か 僧馬

寂寥の戸もり也とてすれど
人有る處をしよやんとぞれよへ
たよせんわひとくとうせよん
らうありま人れ 庐山二嘆竹林セ

賢乃教

罪ゆうう

張安世、郎官乃解て

久とふ也後

丙寅

官吏へ辟て丞相へ車のとよ吐
辭飽の失と以て士とすへて
云てつゝやう後々ようう辟へと
不器といふがわんとせむの多
不候と承し

わくいへる わくいへる
のれうけふ うしもくすわうを

あうや

自 月日ノテ さかやきニシテモ

黒主ハ小ね印門佐ミハセヒト者

多ム人ニモシテ時モソムガのセ
ウセウトムシタニテテモハリス
セラヒトヲムシタニムスレトモ
モ黒主ニシテモ

黒主 沿遠方ハ小近江口ニ西

シキハツ 先考天皇號小松天皇謂
東二室古ニ元至八年二月即位時

歲五十四仁和三年崩年五十七

多ム人ニヨウリシ时 末席佐代時

ナリ

御内ノ 事ニ付シ給ム料價

テアラ金額ヲシテ

中行 正月十五日百官各薦と歎

多角有小納半天武帝凡时より

て中行ニ名づけられ延年三十

相處たるにわざとく変していた

帝大信みてまもること御目見れ

わにしたせら新朝宋

通集中事よりて山輔の事もうりあ
うして後いまへてのやううを
きはいとくさんとひくすきはふゆま
西没入通の事もうりと車よつて
てたゞもうりとくへ一色よも、
きて近古もうりのうりやうう
あめくん身もまきわくへ感へら
アラクうふまとわくえりやううも
スふ吉田中細もれがとくにすれこの

用事やうりうりうりのうりうり
うりうりうりうりうりうりうり
うりうりうりうりうりうりうり
ハ故とありとくへはくもくもくと
まくまくへがくえたり

通集中書王 後後院才一八里三室
主の就主一五中皆の通夷人の軍小家
ノシに通集中してね軍ようううと中
吉へ中皆の店の王へ就主へ

通集中書王 東繼四十建長二年十

二月二十九日後夜幕中入心
於老作主本源從前義清嫡男
幕府迎習之故少數通世說之
若狹前引秦村度之爭座主と下之
事而及喧張今及此云々

漏斗口 晋書陶侃草_カ造_ル其木屑
亦就省令_ム信而掌之其後元會大
官皆晴廳事_ト前代溫於乞以_シ而
筆木屑布地蕭服之是陶侃詩曰
致_カ中原_{アツイ}事亦_シ木屑乞功

名

吉田中納言

藤房_ハ万里小行_ト吉田

モモズ_シ

或_モ莫_モ也_シ之_ト與_シ亦_シの_ト亦_シも_ト
人_トノ_ト人_トノ_ト之_ト亦_シ亦_シ人_トノ_ト人_トノ_ト
く_シり_シう_シう_シた_ト。と_シり_シと_シう_シて_シも_シう_シ
女_ト居_シる_シに_シ時_ト夏_トの_ト日_ト幸_トよ_シ畫_シ印_シ
印_シの_ト印_シと_シくわん_シも_シの_ト印_シ
り_シり_シり_シり_シり_シり_シの_ト印_シも_シの_ト印_シ

典_シひ_シひ_シひ_シひ_シひ_シひ_シの_ト印_シも_シの_ト印_シ

寶鏡

山林水石の如き對月也而りす

わちを付くもぞうらん鏡の畫のもの

印光とぞれともぞうらん鏡の

云へるやうりく鏡の三種の御名

もとむれの如きの清涼鏡よあら

別版

内侍司ツヨウシキより尚侍二人典侍二人掌

仰て人なり侍奉奉養清宣侍よりと可

かく禁祕カニヒ云興作カクサツの獄ひ重シテ有亂

母之人若佐史女カミコス之

葉ハタケに二つ

う宝鏡と神室との事よ和シトトの鏡

四地中の花へとよ安里アリとふれ入私
宝鏡入海アシマのうは源義の鏡と首
あり畫アシマの鏡

入宋アソの沙門西眼と人一切徳とがま
してと波音ハヌイのうちやと常ヒサシとつて
よ安里アリしてしと、首楊嚴ヒサシヤウと満マツ
て那蘭池寺ナランチと号ヒガと云々と有アリと

一へ那蘭池寺ナランチの門モとしと有アリせと
佛ブ乃流ノとひはくとすと西城シキ
竹タケと頸カニとくとくとすとすとすと

うは拂ひいのうやえして、うほえ
しのんじらうくの、宿主の西明寺も小
じまやゆううりとよれ

入室

支那

ヘツラニトモヘテセヨリ度

入店とくの、宋えの時、それへ入室入

元どりとく

通眼上人

名元

トモ云人ありと別

人ううぐ一通眼ハ紗前水斗ちへ同

ひうて日本曹洞宗大始く教書云

乃元建久六年八月死ぬと兼好

ううとく通眼ハ後外シヤウコウトモ
一切、人死に、五千餘卷と七千余卷と
ハタサウ

首楞嚴

十卷

般若院寺

楞嚴

中下度般若院院大通

場院とくとく疏云那闍陀此云施云狀

昂竜名く西城云菴沒羅因有池
池中、有竜名施云狀寺近彼池故以標號

口肺 大い 医房卿タケシ 大半
肺タバコの色カツラに口肺タバコの
清潔セイセキに達タマくし書シテる事コトも多タダ医房
作タマり立タマてくらして
立タマれゆタマせたもタマくいきうの
とタマよして事コトには肺タバコの言タバコり
のうそくせり 医衛 奉用
成衛 医房 正二位 檇中納タマ云タマ囁タマ志
西域傳 玄奘タマ三藏天竺タマ記タマ
記錄十二卷タマ西城記タマ

は顕タマ は顕タマ 乾タマ渡天竺タマ記タマ

上卷タマ下卷タマ

西明寺 広タマては相家タマ門 國測タマ
居タマ寺タマ 田剛タマの窓基タマ才子奉
玄奘タマ才子タマ白氏文集タマ西明
寺牡丹タマの約タマ
乃タマ月タマ乃タマ月タマ乃タマ月タマ
とタマ云院タマ乃タマ水島花タマ出タマて燒タマ
引タマりタマは成紀タマ出タマとタマ也タマとタマ
水島花タマ池タマとタマう

火薬也

ニ速打ニ速杖爆下た

又長火也ややあくらうりう頭昭

袖中折十云十第銀黃帝取蚩尤
頭燧之今燧杖乞以汉彼例漢土年

始用件事國中每山事仍日本國
字其例年始打燧杖然後則燧杖玉
魁玉云。予文教聚爆亦神異經
西方涼山中有人長尺餘祀人則有
寒熱名曰山臊人以竹著火中煠
有声而山臊驚悼歲時記爆亦燃

草起於庭燎 治書考乎爆行

除火と元日とすとと元より
もとえよへ漢武帝代もしと多う
鳥對すりものわくとてとまの衣
外のりりりて施棺のトウアリス
天皇かと前月十六日信送わづりて
燒とそりに全利とみづのうる爆行
ひすうの日本の人もさういふ傳承す
るの傳うへ漢明帝の時々々々天
竺から來りと立獻の道士をとや

ゆうとく御すくつてをもあらへどん
とくにむかひたよきにほの事とお
よどくよろめきぬれを燒失ヤラシツ
ゆくたの家ぢやうこてたゑも
云又あ城裏もや東土ヒタチ國カミツもとあ
城はばれ休ハラフて東土ヒタチへ流布も
と云ふとくそとくそへきの書
とがうしのれへ御通マサニ參スルとく
は能ハシナる月ツキよりうそらやへあま
袖中スリマツわく流小口スリマツけぬスルとく

玉毛庵 拾芥云有八首北僧総人侯
勤印修法念诵等トク

承昌庵 拾芥云天子遙寛所以近
衛次將爲別富乾臨閣得之正殿金
足疊石二条ソウ南をまマ西八町三条小
士生スミ東善女竜王常見ひ前と代卿
引者有云而此保年中遙圓神マツ
まくマクもさんサンのこゆたとくの
つねうのうノウ仰アガへ持スルとくの

ハシニ博ヤ未ハまくはとくもそとうちうやう
ノル有よりのうひゆや鳥羽院に
きくあり。てものありよ。けられ
る。とくは後事すけり。日代よ事う
ニキ。謝上へもと邊よ多と人。高山も
吉原も有。王勅の言と豆稽
仄よ。うづきあきへ末粉よ
へづきあき。下
もやの。牆垣樹木えく
漫琴。見。こまわう

アホも雨吉落葉の。鮭とあとはゆ
まくせし。うづき。あや
やめり。やあ。人の。よもと
て。も雨吉。と。魚。と。ゆ
あんふと。うづき。と。ゆ
竹葉。と。わん。鮭。と。ゆ
うづき。と。ゆ

隆親 四弟 隆季 隆衡 隆親

折青又和名先介今案俗用鮭字

非也鮭音圭鮓鮓魚一名也

其子似

經云鮭

折青又和名先介今案俗用鮭字

其子似

毎 音萬今案英子即
覆盆也見唐韻

赤光一名年魚春

生年中死故名之允魚生

云串小魚也與鰐魚同鮑魚也鱠魚

魚也去魚也云僵也鮓魚也鹽魚也鮓魚

鰐代也

東監寺十建久元年

十月十三日賴朝於達也國菊河次木
三席盤總和副小刀於蛙楚割居折教

奴子

息小童道進也扇中云又今削左

之令食之紙氣味頗懶切早丁角食
凡殊仰自至彼折安よ彼染仰自
笔曰

アハアアアアアアアアアア

鰐代也

和名云鱠魚一名鰐魚

和名安由楊氏漢諾也云春生冬死故名年
銀口魚又云細鱗魚

魚家廟と多うよ濠魚曰高祭鮮矣曰
腔祭也曲礼小人之う謂魚鼈以爲

夏槁助生阜也云古代川也

と圓滑よみえうり輪も船と云

くわうわう毛すれへ信所よまひく天
りく木草綱目とみりよ鱗魚を
さけ鱗鱼へわもじと和名集よ
さく人鞋と船とせにくくつた行
ふゆよもりくに用い
人牛と角をうり人をもとと
平とこうしてとももくとひもくと
ひもくと人をもとへやうのうへ
のとううり人をもとへやうのうへ
えもとわうり律のいましむ

毛皆とうわう律の禁

曲礼

献鳥

佛ミトヲス其首畜鳥則勿モトウタ佛モトウタ也注佛謂
核轉其首恐其喙之害以人也畜者不
然順其性也又曰牧馬效羊者右牽
之效大者左牽之注效陳歛也以右
手牽之為便大以左手防其齧噬
事文類聚云鹿疑遁也不仕牛馬有
踶齒者恐傷人不鬻於市固書
西旅貢獒大保乃作旅獒用訓二

王曰大馬非其土性不畜珍禽奇獸
不育干國注獒大高四尺能知人心
可使者猛而持久者異於常大
犬既牧曰凡馬牛及大有觸能踢
咬人而記號拴繫不如法若狂大
不殺者答四十疏云依雜令畜產
能入者截兩角踰久者絆足齧久
者截兩耳此為標識羈絆之法
相撲守呵噉的母ね下得尼中
くちといれやまつてゆきよさうも
けくわうりらしの角くわくらと
後石のつゝ小刀してこううよりつ
くれけまはざまの跡アヌヌヌモ
口乃あひのていこううゆううてな
み写小モセイツルトモのオヌ
シルム老ムヒヤムルケドコソウ男
尼うそいくみともゆくうりかじと
狂一うちつれくと毛まふスモを
うへんそくとひとわとくの

トトとましに尼も後へ乃もとろ
くんとやぐともとろとろとろ
とてまくとくゆの被ふはてひる
とくねして用ひよるゝとくね
とくねせてのつりんとくねとく
とくねとくわくとくねとくねとく
じる餘物とくねと女性とくねとく
人のつりのとくねとくねとくねとく
の人とすとくねとくねとくねとく
あくねとくねとくねとくねとく

時頼　角束の執權正五位下相模守

号最明寺は名道宗ノリ東

鑑元亭叔書小わう

北條　平時政義時參時時氏

絆時
時頼

柳下源尼　東鑒四十四達長六年十月

六日相川室産女子加持房宮信正
隆辨驗者清吉信教也奥川女房松

下、源尼相川寺群集居安東大門

先成年外有銀物等銀釦五枚馬

五枚
馬

守とどくまうと 徒尼亭(お換ち)

と清待でさりて

さうとへ城下を家

徒尼亭(お換ち)と見事(

徒尼亭(お換ち)と見事(秋田城下

徒尼亭(お換ち)

仙窟(せんくつ)の巣廻(ナガラマツリ)

そへ御(お)まこちて ク紙(シテ)をよきいわ

いりゆうと雲(クモ)が聚(アツミ)小紋(コスモ)

やまとものとて ひめ

物へ爲(ため)すとて

貞永(マサヒロ)式日(ヒタチ)小破(コブ)

且(ツバフ)加修理(カリギ)このりへ奉(タマフ)は改(ハシケ)く彼(ヒ)

尼(ニニ)やへん(ハシケ)とん(トノ)イシ(シ)よ此(シ)

して之粗(ハシケ)れ(ハシケ)れよ(ハシケ)れ(ハシケ)

儉(ハシケ)りと

論語(ルンゴ)子曰(シイハ)物(モノ)失(ハシケ)之(ハシケ)

鮮(ハシケ)矣(ハシケ)又曰(ハシケ)奢(ハシケ)則(ハシケ)不(ハシケ)

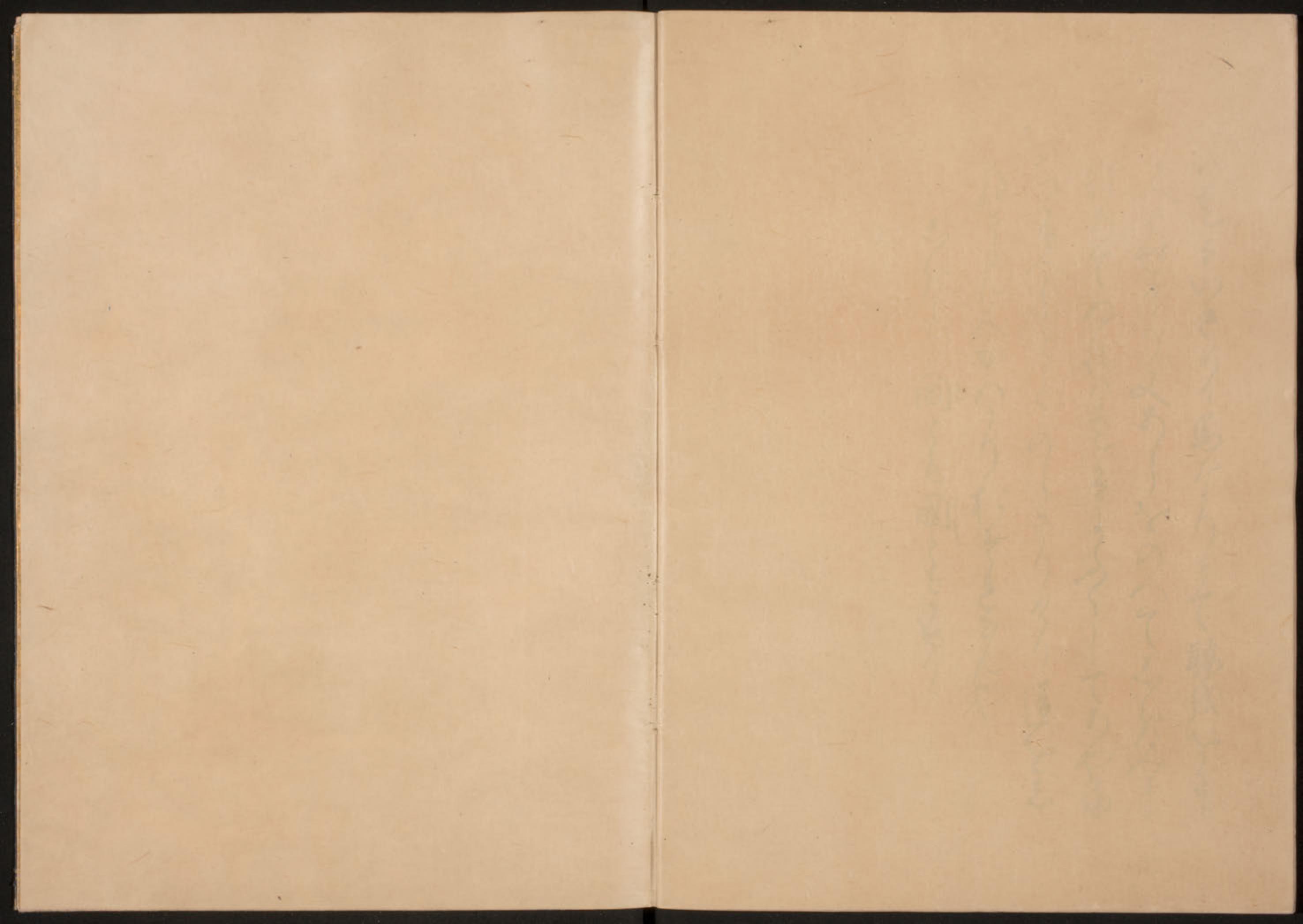
孫(ハシケ)也(ハシケ)寧(ハシケ)固(ハシケ)何(ハシケ)晏(ハシケ)集(ハシケ)解(ハシケ)

之(ハシケ)儉(ハシケ)

御(お)津(ツ)奥(オ)守(ムサシ)泰(タケ)道(ドウ)ハリ

う(ハシケ)も(ハシケ)も(ハシケ)も(ハシケ)も(ハシケ)も(ハシケ)

のそそひてり馬なりとて轉へる
人をもろみやうとのてもらひす
けあそぶれへきよくもくしてわやゆ
らまくとくのくわくくほとく
のくとくへかひりむくもんや
をく 国ニとも國ノとももく



62
10
3

1
10
3

X
110X
516
4

